



Data

監督・製作・原案：デイビッド・ド
フキン

製作総指揮：ロバート・ダウニーJ
R.

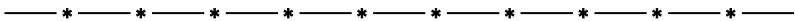
出演：ロバート・ダウニーJR. /
ロバート・デュヴァル/ベラ・
ファミガ/ビンセント・ド
ノフリオ/ジェレミー・スト
ロング/ダックス・シェパー
ド/ビリー・ボブ・ソート
ン/レイトン・ミスター/
ケン・ハワード

👁️👁️ みどころ

英題の『THE JUDGE』だけでは何の映画かわからないが、邦題をみると、誰でもサスペンス風の法廷ドラマを連想……。たしかに、本作も法科大学院の教材に最適だが、それ以上に頑固で保守的な裁判官VS金儲け主義の敏腕弁護士という父子の確執の人間ドラマが面白い。

父親の殺人事件を息子が弁護するのも大変だが、弁護士の言うことを聞かない依頼者は弁護士にとって最悪。さて、法廷はいかなる展開に？またその中で、父子の和解や兄弟の絆の確認は如何に……？

敏腕弁護士の意外な女性関係もサブストーリーとして楽しみながら、142分の重厚な家族ドラマをじっくりと楽しみたい。



■法曹一家は数あれど、この父子の場合は？■

『赤かぶ検事奮戦記』（80年～92年）は、父親が司法試験に合格したエリートではなく、検察事務官からの叩き上げの検事、そして、毎回法廷でその検事と「対決」するのが娘の弁護士、という設定だった。他方、『リンカーン弁護士』（11年）では、主人公と対決する検事は離婚した元妻だったし、詳しくは描かれていないが、父親は真面目で勤勉な弁護士だったらしい（『シネマルーム29』178頁参照）。また、現在の日本の最高裁判所長官・寺田逸郎氏は私と同期、同クラスの友人だが、その父親の寺田治郎氏も元最高裁判所長官だった。このように「法曹一家」は数多い。かくいう坂和家も、私、息子、娘、息子の嫁がすべて弁護士だ。

しかして、本作では、父親が裁判官で、3人兄弟のうち2番目のハンク・パーマー（ロ

パート・ダウニー J.R.) が弁護士だ。地元を愛する、頑固で保守的タイプの父親ジョセフ・パーマー (ロバート・デュバル) は、地元インディアナ州の小さな町カーリンヴィル (これは架空の町) で40年以上判事 (ジャッジ) をしているらしい。これに対して、自分の田舎が嫌でたまらなかった次男のハンクは、有名な法科大学院をトップで卒業した後、大都市シカゴの弁護士として活躍。今や金持ちの依頼者のみを受任し、常に勝訴する敏腕弁護士として有名になっていた。法曹一家は数あれど、さて本作に見る父ジョセフと息子ハンクの場合は？

■ハンクはどんな弁護士？一見してかなり嫌なヤツ？■

『リンカーン弁護士』の主人公は、リンカーン・コンチネンタルを移動するオフィスとする刑事専門の敏腕弁護士というキャラクターだったが、本作を見ただけではハンクの事務所は共同か、単独か、パートナーか、勤務弁護士か、そこらあたりが全く描かれないので、実際にどんな形態で働いているのかはわからない。しかし、本作冒頭で提示される、大都市シカゴの巨大高層ビルにおける「トイレのシーン」を見れば、ハンクがどんな弁護士なのか、すぐに理解できる。

ハンクに対して相当なやっかみを抱いているらしい検察官とハンクが展開する「しょんべん談義」で、ハンクは「たとえ無罪でも貧乏人はボクを雇えない」と豪語しているから、実に嫌な奴？少なくとも、私のように有能だが (?), 真面目で誠実な (?) 弁護士の目にはそう映ってしまうが・・・。

■主人公の故郷は？せっかく帰って来たのに・・・■

本作の原案を書き、製作、監督したデイビッド・ドブキンは『シャンハイ・ナイト』(03年) (『シネマルーム3』304頁参照) の監督だが、その経歴を見ると、コメディ系で成功している監督らしい。

パンフレットにある、そのデイビッド・ドブキン監督と本作を製作したスーザン・ダウニー (ロバート・ダウニー J.R. の奥さん) の「TALK」によると、「ストーリーは僕の母ががんで亡くなるときの体験に基づいている」というだけで、特に法曹界に縁があったわけではない。したがって、原題の『THE JUDGE』、邦題の『ジャッジ 裁かれる判事』というタイトルだけを見れば、本作はさてどんな法廷ドラマ？とってしまうが、本作は法廷ドラマの要素は小さく、むしろ父親と息子との確執と、3人兄弟たちの絆をテーマにした映画だ。冒頭、これから法廷が始まろうとするところで、ハンクのケータイに入ってきたのが母親の計報。故郷が嫌いで飛び出してきたハンクも、さすがに今日の法廷は延期してもらい、故郷に帰るところから本作のストーリーが始まっていく。

ハンクには兄グレン・パーマー (ピンセント・ドノフリオ) と弟デール・パーマー (ジェレミー・ストロング) がいた。ハンクが母親の葬儀のために久しぶりに故郷に帰ってきたことにジョセフは一応感謝の姿勢を示したが、地元の人たちにはハグするのに対し、ハ

ンクには単に握手のみという待遇だから、ハンクが面白くないのは当然。また、145キロの速球を投げて野球の天才と呼ばれ、将来は大リーグ入りを囑望されながら、怪我のためそれを断念し、今は地元で自動車修理店を営んでいるグレンは、今でも父親お気に入りの息子だが、知的障害があり、ムービーカメラを手放せない弟のデールは、疎んじられている様子。さらに、物語の進行の中で明らかになるように、17歳の頃に「ある事件」を起こし、父親の手によって裁かれながら温情ある判決とならず、少年院送りとされてしまったハンクは、ハッキリ父親から嫌われていると認識していた。そんなことは今では十分わかっているが、せつかく母親の葬儀のため、忙しい事件処理の合間を縫って嫌な田舎町に戻って来たのに……。

■□■本作は法廷モノ？それとも父子の確執ドラマ？■□■



**【初回限定生産】ジャッジ 裁かれる判事 ブルーレイ&DVD セット ¥3,790円＋税
ワーナー・ブラザース・ホームエンターテイメント**

本作の導入部では、父親や父親の住むカーリンヴィルの町と全くかみ合わないハンクの苦悩がタツプリ描かれる。父親は双子の兄を可愛がり、弟の自分は疎まれていると感じ、ひねくれている双子の弟。ジェームズ・ディーンの初主演作『エデンの東』（55年）ではそんな父子関係がテーマだった。そして、それは旧約聖書の第1節アダムとイヴの息子カインが神に愛される弟アベルに嫉妬して殺してしまう話を題材とし、舞台を現代に移し変えたものだった。

本作における長男グレンと次男ハンクの仲は、三男デールがいることもあって旧約聖書におけるカインとアベルや、『エデンの東』で観た双子の兄弟ほど険悪ではなく、三者の間

で微妙なバランスが保たれている。また、デールが持っている3人兄弟が小さい頃の家族5人で楽しく過ごす8mmフィルムを見れば、かつてはこの家族の仲は相当良かったことがわかる。しかるに、なぜハンクと父親の仲は今こんなに悪くなっているの？

本作は2時間22分の長尺だが、それは白熱した法廷ドラマだからではなく、父と子の確執と兄弟3人の家族ドラマを丁寧に描いているためだ。したがって、本作は法廷モノとして法科大学院で必ず上映すべき映画とはいえないので、その点は悪しからず・・・。

■□■保安官が判事を連行！息子の弁護士は？■□■

日本の裁判官と違い、アメリカの小さな町の判事は一種の「権力者」になりうるのが、カーリンヴィルの法廷で「ジャッジ」として君臨するジョセフの姿を見ているとよくわかる。ところが、葬儀後、飲みに行った3人兄弟が自宅に帰ると、ジョセフの車の前部が破損していることが判明。翌朝、「誰かが勝手に自分の車を乗って行って壊した」と憤慨するジョセフに対し、ハンクが「昨夜コンビニに買い物に行った時に自分でぶつけたんだろう」と言い返すと、何とジョセフはハンクの結婚生活が破綻していることを兄や弟の前で暴露。その結果、頭にきたハンクは、「こんな家二度と戻るものか！」と出て行くことに。

母親も亡くなった今、これにてパーマー家の家族崩壊は極まったと思ったが、飛行機の離陸直前にグレンから「父親が人を轢いた疑いで保安官に連行された」という電話が入ったから、さてハンクはどうするの？

■□■肉親の弁護は難しい。それをまざまざと・・・■□■

私も経験があるが、問題を起こした肉親に対し、一方では「そんなの知るか！お前が勝手に対応しろ！」と思う反面、やはり心優しく、かつ一流の弁護士として(?)自分が対応してやらなければ、と思う気持ちも・・・。後者の気持ちに従って、ハンクが警察に赴いたところ、①車にはねられた男の遺体が発見、②父の車が事故現場を通ったことが目撃、③車で発見された血痕が遺体の血液型と一致したことが告げられ、ジョセフは第2級殺人の容疑者とされることに。それに対して、ハンクは「それだけでジョセフを犯人にすることはできない」と反論したが、これは弁護士としての習性？それとも確信？

ジョセフがウソをつく人間でないことはハンクが一番よくわかっているが、そのジョセフから「自分がはねたのだろうが、記憶がない」と言われると、弁護方針の立てようがない。さらに、被害者のマーク・ブラックウェルと、ジャッジとして彼に判決を下したジョセフとの微妙な関係を聞くと、ひょっとしてジョセフは人並みにブラックウェルに対して個人的な恨みを・・・？

ハンクは自分の弁護士の見解をしっかりと説明してジョセフを説得し、この案件は予審段階で終了させたいと考えていたが、肝心のジョセフから「お前には頼らん！」「地元の弁護士を雇う！」と言われると、「勝手にしろ！」となったのは仕方ないが・・・

■□■やっぱり、一流弁護士に依頼しなければ・・・■□■

アメリカにおけるシカゴとインディアナ州の小さな町カーリンヴィルとの格差を、日本で例えれば東京都と△△村？日本でも弁護士の東京集中が顕著で、地方にいくと弁護士は少ないうえ、そのレベル（の低さ）が問題になるケースがある。ジョセフがジャッジをしているカーリンヴィルには弁護士がいるだけマシだが、ジョセフが雇った若い弁護士・C. P. ケネディ（ダックス・シェパード）は、ハンクからのおせっかいな質問に対する回答を聞いているだけでも、明らかに経験不足であることがわかる。これでホントにジョセフの弁護人が務まるの？

そう心配していると、案の定、彼はジョセフの罪を追及するドワイト・ディッカム特別検察官（ビリー・ボブ・ソートン）の巧みな弁論や尋問についていくことができなかったから、アレレ・・・。途中、ケネディの後ろの席に座ったハンクが何度もケネディに口出しする風景は面白いが、厳正に法廷を運営する裁判官から「あなたも弁護士か？」と質問されたのに対して、ジョセフが「違います」と答えれば、「ひっこんどれ！」となるのは仕方ない。その結果、何とか「予審」段階で終わらせようとしたハンクの期待に反して、事件は陪審員12名を選んで審理する「本裁判」に移行してしまうことに。いくら父子の確執があるとはいえ、やっぱり一流弁護士に依頼しなければ・・・。

■□■一流弁護士だって男！すると、その女関係は・・・？■□■

本作のテーマは、ジャッジのジョセフと、その次男で「金持ちの事件しか受任しない」と公言している、かなり嫌味だが腕は一流の弁護士ハンクとの父子の確執。しかし、一流弁護士だって男だから、本作ではハンクの華やかな女関係（？）の中で浮かび上がってくるある女性と、そこで暗示される別の父子関係（？）も、サブストーリーのテーマになる。本作導入部のハンクのセリフで印象的なのは、故郷のカーリンヴィルについて、「誰も行きたくない町だ。みんな出て行く」というもの。そのセリフどおり、母親の葬儀のために忙しくかつ金の儲かる仕事を放置して故郷に戻って来たのに、ジョセフの態度はメチャ気に入らないもの。ハンクが寝るための部屋も、物置同然という待遇だ。

そんなハンクにとって、唯一故郷に戻ってきて良かったのは、昔からよく行っていたダイナーで、かつての恋人サマンサ・パウエル（ベラ・ファームガ）と再会できたこと。サマンサはこの店で同じ仕事に20年間も従事していたわけだが、後日そこにはちょっとした面白いウラ話もあるので、そのストーリーにも注目したい。それがわかれば、当然のように「葬儀後のデート」の約束となったが、シカゴの大邸宅を出る時、離婚調停を出そうとしている妻と大ゲンカをしてきたハンクは、ひょっとしてサマンサとヨリを戻すことになるの？

私にとって意外だったのは、葬儀終了後、兄弟3人で飲みに行った店で起きたちょっと

したトラブルを、ハンクが達者な弁論(?)によって処理したお陰で、仲の良くなった若いホステスの女の子カーラ・パウエル(レイトン・ミスター)とちやっかり「好い目」をしていること。スクリーン上で見せてくれるのは、2人のディープキスまでだが、その後の更なる進展があったの・・・?シカゴの一流弁護士ともなれば、女問題では特に慎重を要するはずで、「旅の恥はかき捨て」とはいかないはずだが、さて・・・。

■□■この娘の父親は?そんな新しい問題も!■□■

さらにある日、ある偶然でハンクがサマンサの車に乗せてもらうと、その助手席から後ろを振り向いてきたのが、何とカーラ。驚くなかれ、カーラはサマンサの娘だったのだ。ところで、サマンサはシングルマザーだから、その父親は誰?サマンサはカーラには父親が誰かわからないと言っているそうだが、サマンサにはわかっているはずだ。

本作後半では、ジョセフの裁判が本格的な陪審裁判に移行した後、さらにある重大な新証拠の発見によって、2級殺人から故意の殺人に移行していく。そんな中、シカゴからカーリンヴィルへやってきたハンクの一人娘ローレン・パーマー(エマ・トレンブレイ)との束の間の安らぎの中、ローレンが髪の毛を噛むクセと、カーラが見せる髪の毛を噛むクセが全く同じであることを発見して、ハッとするハンクの姿が描かれる。しかも、カーラの誕生日を聞いたハンクが、自分とサマンサの初エッチの日から指折り数えてみると・・・。

これでは、ジョセフとハンクとの確執も大変だが、別途、父親としてのハンクと離婚必至の妻との間に生まれた一人娘ローレンの親友問題や、ハンクとカーラとの父娘関係(の有無)という問題も急浮上してくるのでは・・・?

■□■弁護士にとって、こんな依頼者は最悪!■□■

ジョセフは当然ながら人一倍気が強い。しかし、寄る年波には勝てないうえ、ハンクの追及によって大腸がんを患っていることを洩々告白。しかも、そのレベルは4だから、かなりヤバイ。さらに、長男のグレンたちにも内緒で洩々受けている抗がん剤治療のせいで、記憶障害や幻覚等の症状も出ているらしい。そこで推測される合理的な結論は、あの日「ジョセフは、自分の運転する車でブラックウェルをはねたけれども、ジョセフは覚えていない」ということだが、それなら心神喪失の主張が可能!

そんな弁護方針が決まれば、私が弁護人を務めても、ジョセフの無罪を勝ち取ることができるが、それはジョセフが弁護士の指示どおり動くことが前提になる。弁護士にとって何よりやっかいなのは、弁護士の指示に従わず、法廷で自分勝手な言動を取る依頼者だが、まさにジョセフはそれ。ジョセフは自分にそんな症状があったことがわかれば、近時の自分が書いた判決の正当性にキズがつくと主張して、病気のことは絶対法廷ではしゃべらない、と頑固な姿勢を崩さないからかなわない。そのうえ、法廷での被告人尋問の打ち合わせすら「いらぬ」と拒否したから、弁護士としては万事体す。成り行きに任せるしか

かった。

しかして、法廷でジョセフは、検事の質問が終わったにもかかわらず、さらに「まだ言うことがある」との態度を取ったから、アレレ……。ハンクは必死でその証言を止めようとしたが、裁判官も検事も固唾を呑んでジョセフのさらなる証言を待っていると、何と……。

■□■やっぱり、本作の法廷シーンは法科大学院の教材に！■□■

日本の刑事裁判のやり方とアメリカのそれが大きく異なることは大前提としたうえで、やはり本作にみる法廷シーンは、法科大学院の教材としたい。そこでジョセフが語った「銃を持ってガールフレンドの家に行き、寝室の窓を撃ったブラックウェルは、その出来の悪いところが自分の次男によく似ていたので、誤って30日の刑という甘い判決を下してしまった」との証言を、ハンクはジョセフの息子として一体どう聞けばいいの？また、続いてジョセフが語る、「そんなブラックウェルが出所した朝、ガールフレンドを溺死させたため、自分はブラックウェルを恨んでいた」との証言に対し、ハンクは弁護人としてどう切り返せばいいの？

一瞬目に涙を浮かべながら、とっさの判断でハンクは「人をはねたことは憶えているのか？」と質問し、「憶えていない」という証言を引き出したが、さてこの一連のやり取りについて12人の陪審員たちはどのように判断するのだろうか？

■□■父子の和解は？■□■

法廷モノではないといいながら、本作のクライマックスとなる法廷での丁丁発止のやりとりは、大いに興奮させられる。そして、陪審員たちが導き出した有罪、無罪の結論も、私の感覚では割と常識的で妥当なものだ。他方、裁判官が言い渡した、懲役4年の実刑判決は私には意外だったが、さてあなたのご意見は……？

もっとも、その後のハンクの努力の甲斐あって「恩赦」が認められたため、ひょっとして刑務所の中で死んでしまうのではないかと心配していたジョセフは、無事シャバで再びハンクと再会できることに。それは、家族の語らいの中で何度も登場していた魚釣りのシーンとなるが、そこにみる父子の会話と、まさに「これぞ理想的なポックリ死」と思えるシーンに注目したい。そして、本作のラストは父親の葬儀を抜け出したハンクが裁判所に行き、そこでじっと判事席を見つめるシーン。たった1つしかない判事のイスは重厚だが、手で押すとクルクル回るお馴染みのもの。今、ハンクの手でかつて42年間も愛用していたジョセフの判事のイスはゆっくり回り始めたが、その停まる場所は……？

『エデンの東』における父子の和解はかなり劇的で感動的だったが、本作にみる父子の和解はそんな静かなシーンになるのでそれに注目！

■□■兄弟の絆は？もう1つの父娘関係は？■□■

さらに続く本作のラストは、冒頭のシーンと軌を一にするかのように、シカゴの高層ビルにある、あのトイレのシーンとなる。トイレで鉢合わせになるのも冒頭と同じあの検察官だが、そこで交わされる会話を聞き、カーリンヴィルにある法廷の机を惹きむように撫でていたハンクの姿を見ると、ひょっとしてハンクはシカゴを捨てて故郷へ戻るの・・・？すると、母と別れ、更に父と別れることになった3兄弟の絆は、再度地元で復活するの？

他方、ハンクの離婚問題の解決と親権者の決定は今後の課題だが、カーラの父親が誰かという点についてのハンクとサマンサの意味シな会話をあなたはどうか受け止める？そして、そのやりとりを受けて、今後のハンクとカーラとの父娘関係の解明は？さらに、ハンクとサマンサとの「再婚」はあるの？別にそんなところまで観客が心配してやる必要はないが、敏腕弁護士といいながら、不器用な生き方が目立つハンクだけに、多少その方面にも興味が・・・。

2015（平成27）年1月28日記



【初回限定生産】 ジャッジ 裁かれる判事
ブルーレイ&DVD セット ¥3,790 円+税
ワーナー・ブラザーズ・ホームエンターテイメント